

国内事例
in Japan

2

川ガキ再生プロジェクトで「お蝶淵」復活／ 北広島町

松原裕樹 (特定非営利活動法人ひろしまNPOセンター 事務局次長)

いつからか田舎でも都会でもどこでも聞かれるルール「川に遊びに行ってはいけないよ」。広島県北広島町大朝でも例外ではない。人口減少や少子高齢化が進むこの過疎地域では、子どもが野外で遊ぶ姿を見なくなっている。子どもたちは川に近づくと大目玉をくらうことすらある。大人が決めたルールで子ども社会が育ちにくく、人と自然のつながりも希薄化。いつしか川ガキ（川で遊ぶガキンチョ（子ども））は絶滅危惧種になっていった。

ガキンチョにも 川の楽しさを

地域に流れる可愛川の深み「お蝶淵」は、おじいちゃんやおばあちゃんが昔遊んでいた思い出の場所。「ガキンチョにも川の楽しさを味わわせたいよのお」という、今では遠い存在になってしまった川に想いを寄せる住民の一言がきっかけとなり、小

学校とNPO法人INE OASA（い〜ね！おおあさ）が中心となって地域や関係機関に呼びかけ、2015年春に「川ガキ再生プロジェクト」がスタート。集まった総勢50名程の大人が、近寄りにくくなった川岸の竹や草を刈り、子どもたちが川のごみを拾い集めたおかげで、お蝶淵で遊ぶための環境が復活した。

待ちに待った夏休みの登校日、学校の先生や地域の大人が見守る中、大朝小学校の6年生16名がお蝶淵で遊び騒ぐと、「子どもの声がするのはええのお」と住民も大いに喜ぶ。子どもの活動を支援することを通して、学校と地域のつながりも深まり、冬に開催したプロジェクト報告会では、保護者や関係者へのさらなる理解を促した。2年目の今夏は4～6年生を対象に専門家の協力を得ながら授業を行い、子どもたち自身が川遊びのルールをつくり、再びお蝶淵に子どもたちの声が響いた。



プロジェクトをコーディネートするINE OASAの堀田高広氏は「昔の人が愛した場所を今の人に伝えたい」と語る

絶滅危惧種の川ガキと オオサンショウウオが 泳ぐ地域の宝

このプロジェクトにはふたつのポイントがある。ひとつ目は「思考の転換」。川で遊んではいけないという抑制型の問題解決から、川で遊ばせたいという促進型の夢実現の手法を用いたこと。ふたつ目は「当事者の主体性」。大人が全てお膳立てした中で子どもが川遊びするのではなく、子どもたち自身がプロジェクトに参画することで自律を目指している。人と自然が共に生きていく社会を築くために、将来世代のニーズを損なうことなく現在世代のニーズを満たすためのヒントがここにある。

プロジェクトはまだ走り始めたばかり。川と一体となって遊ぶ子どもの暮らしを支えることで、人と人、人と自然のつながりが再生することを期待したい。10年後もお蝶淵で川ガキが遊んでいることを願う。

松原裕樹 (まつばら ひろき)

1982年広島生まれ。NPOや企業、渡米経験を経て現職。環境・教育・地域づくり・観光・防災などの分野を横断して、地域の魅力づくりや課題解決に関する事業の企画・運営・コーディネートに取り組んでいる。



お蝶淵で泳いだり魚をとったり、遊びに工夫を見いだす子どもたち